

日高昌克《峻峰秋霽図》1955～59(昭和30～34)年頃 田辺市立美術館蔵



日高昌克《白菜》1949(昭和24)年頃 田辺市立美術館蔵



渡瀬凌雲《仙境熊野》1975(昭和50)年 田辺市立美術館蔵



渡瀬凌雲《清秋風味》1963(昭和38)年 田辺市立美術館蔵

絵画と出会う「この一点!」

版画の表現

会場：熊野古道なかへち美術館
会期：2020年10月3日(土)～11月15日(日)

前川千帆(まえかわ・せんぱん/1888～1960)は、読売新聞社などで連載漫画を描くかわら、木版画の制作に取り組みました。1919(大正8)年の第1回創作版画協会展に出品して、版画家としての創作活動を開始し、1931(昭和6)年に創立された日本版画協会展には第1回展から亡くなるまで会員として出品を続けました。官展や春陽会展にも入選を重ねた、近代の代表的な木版画家の一人です。

千帆は戦前から、各地の温泉を訪れて、その風景を作品にする『版画浴泉譜』のシリーズに取り組んでいました。図版の《椿》は、戦後に出版された『続々版画浴泉譜』に収められている和歌山の温泉地の情景の一つです。椿温泉(白浜町)の老舗旅館の縁側にたたずむ若い女性の姿が、穏やかな青い海を背に描かれています。画面奥にある島は、当地のシンボルである蓬莱島と思われます。椿温泉は1960(昭和35)年頃から周辺が開発され観光地化してゆきますが、千帆が訪れたのはそれよりも前で、長期滞在の湯治客が大半の頃でした。千帆のエッセイには「椿温泉は療養の客多く、大半自炊の人。早朝庭を掃く老夫人。縁側に世帯道具を並べた部屋。秋刀魚を焼く女。」と当時の様子が綴られています。

今年は千帆が亡くなって60年を迎える年になります。この機会に、10月から開催の小企画展「版画の表現」で、上記の《椿》を含む紀南地方の温泉地を描いた7点を紹介します。

(学芸員 知野 季里穂)



前川千帆《椿》1952(昭和27)年 田辺市立美術館蔵

田辺市立美術館 NEWS ORANGE Vol.33

編集・発行：田辺市立美術館
発行年月日：令和2年10月1日

田辺市立美術館

〒646-0015 和歌山県田辺市たきない町24-43
TEL.0739-24-3770 FAX.0739-24-3771
http://www.city.tanabe.lg.jp/bijutsukan/

田辺市立美術館分館 熊野古道なかへち美術館

〒646-1402 和歌山県田辺市中辺路町近露891
TEL.0739-65-0390 FAX.0739-65-0392
http://www.city.tanabe.lg.jp/nakahechibijutsukan/

田辺市立美術館へのきもち②③

現在私は、紀南地方を主なエリアとする新聞『紀伊民報』で週に1度、金曜夕刊掲載の「紀伊文化」を担当しています。田辺市立美術館や熊野古道なかへち美術館には、展覧会やイベント開催の際にうかがって、スタッフの方々にも度々取材させていただいています。

今回、美術館広報紙への執筆のご依頼を頂いて、記事出稿のためにしばしば美術館にお邪魔してはいるものの、一体何が書けるのか非常に不安な気持ちになりましたが、素直な私の「美術館へのきもち」を書かせていただこうと思いました。

文化関係の記事を担当して長くなり、振り返れば、さまざまな展覧会を取材してきました。最近では、故人から現役作家まで日本画家の絵本原画制作に焦点を当てた特別展「絵本にみる日本画」が強く印象に残っています。新型コロナウイルス感染症の拡大防止のために臨時休館を余儀なくされ、開幕が遅れたのは残念でしたが、田辺市生まれの稗田一穂の作品、昨年特別展が開催された女性画家、秋野不矩の作品などを通して、文学的、美術的な性格を備えた絵本の魅力を再発見することができました。

個人的な考えですが、美術作品の良さは、専門的な知識がなくても、視覚から入ってくる情報が直に心に訴え掛けてくる点だと思います。好きな作品の前に立ち、静かに鑑賞している瞬間、世界は自分と作品の対一だけのような気がします。そのような貴重な「出会い」を与えてくれる美術館の存在に感謝しています。おかげで地元ゆかりのある画家の作品はもちろん、さまざまな作家の佳作に接することができています。

美術館は作品を展示する場だけではなく、その美的空間を生かした、多彩なイベントを発信する場にもなっています。美術館が主催するコンサートを取材したときには、いつもと違う館の雰囲気を楽しむことができました。今はコロナ禍で難しいかもしれませんが、これからも、美術作品を鑑賞するだけでなく、地域の人々が気軽に芸術に触れることのできる場であってほしいと願います。

田辺市立美術館は来年3月末まで、照明設備の改修や開館25周年記念展の準備、作品・資料の整理などのために休館とうかがっていますが、再開後の活動に期待を膨らませています。

熊野古道なかへち美術館は2018年に開館20周年を迎え、小紙の文化面でも、これまでの歩みを振り返る記事を掲載しました。美術館の設計者は、金沢21世紀美術館(石川県)などを手掛けた世界的な建築家ユニット、妹島和世+西沢立衛/SANAAです。その建築がもつ魅力を活かした斬新な試みを、今後も取材してゆければと思っています。

田辺市の文化の拠点となっている美術館の「これから」を、市民の一人として大変楽しみにしていますし、記者として紙面を通じて、読者の皆さまに丁寧に情報発信し続ける義務を感じています。

(株式会社紀伊民報記者
蛭子 みどり)



本社デスクにて出稿中の筆者

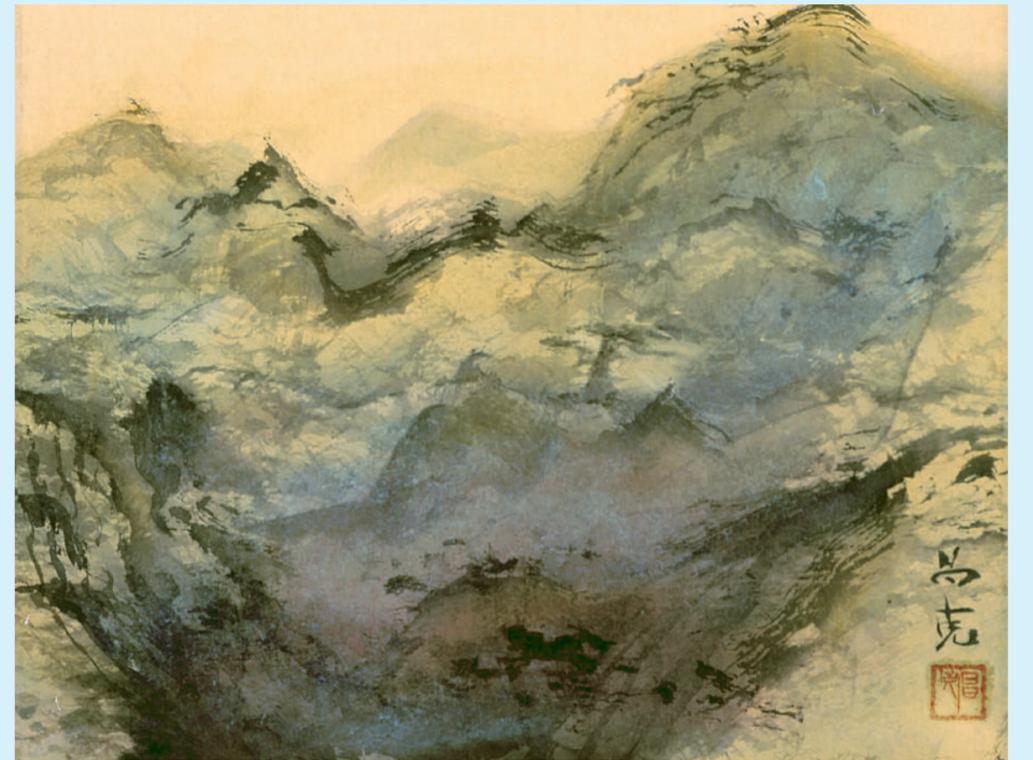
編集後記

今号の折込付録は、ちょっとしたメモにも趣きが出る「文人美ミニ」の第二弾です。芸術の秋をお楽しみいただくアイテムになればと思います。本館は10月から改修工事に入るため長期休館となりますが、分館では11月15日まで「版画の表現」展を開催して、皆さまのご来館をお待ちしています。(F.O.)

田辺市立美術館NEWS

ORANGE

Vol.33



日高昌克《峻峰秋霽図》1955～59(昭和30～34)年頃

田辺市立美術館蔵

作品紹介 日高昌克《峻峰秋霽図》

日高昌克(1881～1961)は本業である耳鼻咽喉科医の傍ら、1914(大正3)年から和歌山市在住の日本画家、阪井芳泉(1880～1942)に師事して四条派の運筆を学び、1918(大正7)年頃からは富岡鉄斎(1837～1924)に傾倒し、南宗画・北宗画・浮世絵など様々な古画の模写を積極的に行って画家としての研鑽を重ねました。また、野長瀬晩花(1889～1964)を通じて国画創作協会のメンバーと交流のあった昌克は村上華岳(1888～1939)とも知己であり、その作風に多くの影響を受けています。1937(昭和12)年、東京銀座で初の個展を開催、翌年には開業していた医院を長男に譲り、自身は画業に専念する決意を固めました。

1954(昭和29)年、昌克は和歌山県伊都郡笠田町(現在のかつらぎ町)の背山に住まいを移して画室をかまえました。長く患っていた関節リウマチの悪化で、昌克はこの頃にはすでに歩くことが出来なくなっていたため、寝床の中から観賞出来る背山の風景を見ながら絵筆をとっていました。昌克はその著述のなかで「四季おりおりに移りゆく背山の風光は晴に宜く、雨に宜く、月雪に宜く、朝霧夕靄、悉くこれ皆好画材である。」と述べ、以降の作品の多くを「胸中の丘壑」と呼んで思いのままに描いていました。《峻峰秋霽図》もこの最晩年に描かれた作品の一つです。

(主任 辰巳 充)

REPORT 「絵本にみる日本画」・「秋野不矩の絵本」

日本画家の絵本原画制作に焦点をあてた展覧会「絵本にみる日本画」と、昨年特別展を開催した秋野不矩（1908～2001）の絵本原画制作を特集する展覧会「秋野不矩の絵本」を、それぞれ田辺市立美術館と熊野古道なかへち美術館で、今年5月16日から6月21日にかけて開催しました。

当初は、4月18日から5月24日までの会期を設定して計画を進めていましたが、その最中に国内で新型コロナウイルス感染症の蔓延が危惧される事態が進行し、全国に緊急事態宣言が発令されるまでに至りました。出品のご了承をいただいていた作品を拝借して展示し、感染症の予防策についても協議して、開幕の準備を整えていましたが、最終的に当市の教育機関もすべて休校、休館の措置をとることとなり、展覧会の開催を断念することも検討せざるを得ませんでした。

しかし幸いにして、休館中に和歌山県内の感染症の流行は免れる見通しとなり、5月の連休後に開館が可能となる目処が立ったため、内部で協議を重ね、会期を変更して約1箇月間の開催の可能性を探ることにしました。

8月から開催を予定していた展覧会を中止して、来年度以降に再計画することを関係者の方々に相談してご了承をいただき、本展覧会にご所蔵品をご出品の方々に、作品拝借期間の延長と展示期間の変更をお願いして、ご理解をいただくことができました。今回の館蔵品展の会期も変更して、何とかこの二つの展覧会を、展示内容に関してはほぼ企画案通りに開催することが叶いました。



「絵本にみる日本画」展示風景（田辺市立美術館）



「秋野不矩の絵本」展示風景（熊野古道なかへち美術館）

本当に大勢の方々のご支援のおかげで、改めて当館に寄せていただいている無数のお気持ちを深く感じる時でした。本展覧会の担当者として、先行きの不安を抱えながら、作品を収蔵されている方々と状態を点検し、梱包して当館に運び込み、展示作業をしてゆく途上で、自分自身が作品に励まされている感覚があり、このようなときだからこそ、この展覧会を少しでも多くの人に届けたいという気持ちを強くしていましたので、たいへん嬉しいことでした。

絵本という芸術は、家に居ながらにしても、それを手で受けとめることができます。実際にこの期間に、それを楽しみ、慰めとされた方々も少なくなかったことと想像します。同時に、絵本のために描かれた絵画にも、印刷とは違った「絵」としての魅力があふれているものが数多くあります。そうしたことを、みなさんにお伝えして共有する、展覧会という場をつくる美術館の役割についても省みる機会となりました。まだまだ困難が克服されたわけではありませんが、これからも美術館の存在が、間違いなく有意義なものになるように考え、活動してゆきたいと思います。（学芸員 三谷 渉）

REPORT 「文人画コレクション展 松・竹・梅・蘭・菊」・「青年期の凌雲」

田辺市立美術館では、これまで所蔵する文人画コレクションを題材に、テーマを設定してさまざまな角度から江戸時代に隆盛した「文人画」と呼ばれる作品を紹介してきました。昨年度は「文人画にみる心象風景」と題し、その思想や表現をテーマに精神面についてスポットをあてた展覧会を開催しました。今回は展示室1・2を会場に、文人画が持つ独特の思想が背景にありつつも、山水画で描かれた心象風景の表現とはまた違った、松竹梅や蘭菊などの植物や小動物、虫などを主題とした花鳥表現をご覧ください機会としました。同時に、展示室3・4・5では「凌雲の花鳥画」と題し、和歌山ゆかりの南画家・渡瀬凌雲（1904～1980）が描いたさまざまな動植物の作品や、渡米経験で影響を受けた西洋的な表現が見られる作品を紹介しました。



「松・竹・梅・蘭・菊」より竹のコーナー

熊野古道なかへち美術館では、田辺市立美術館で展示している渡瀬凌雲の青年期の画業にスポットをあて、節に画技を学んだ10代後半に描いた作品から帝国美術院展に入選した20代後半から30代の作品などを中心に、若かりし頃の凌雲の活動や交友を紹介する展覧会の内容としました。



「青年期の凌雲」より10代の頃の作品

両館とも昨年度末からの新型コロナウイルス感染症の影響は大きく、各展覧会で計画していた展示解説会も密を防ぐ観点から開催を断念せざるを得なかったことが残念でした。展覧会に伴う各イベントなどはまたの機会をご期待いただきますとともに、文人画や南画に関する質問はいつでもお答えいたしますので、お気軽にお尋ねください。（主任 辰巳 充）

新型コロナウイルス感染症への対応

当館では、地震や火災、停電といった不測の時の対応については、要項を作成して職員全員が共有し、訓練も行ってきました。しかし、今年に入って世界中で大きな問題となった、新型コロナウイルスが引き起こす感染症が流行するといった事態が生じた際に、どのような方策をとって美術館の活動を維持するのかが、ほとんど考えられていませんでした。

今年度の活動を始めるにあたって、何より急いで、感染症の流行時も開館し続けることを前提にした、対策の要項を作成する必要性に迫られました。にわかなことでしたが、科学的に明らかになっている、今回のウィルスとその伝播経路の特性をもとに、「ウィルスの侵入予防」、「職員の感染予防」、「来館者の感染予防」、「感染予防の啓発」の四項目を立てて要項を作り、展覧会は計画通りに行う準備を進めました。

結果的には、全国に緊急事態宣言が発令される状況となり、4月18日から予定していた展覧会の開催を約1箇月延期し、この間は臨時休館することとなりましたが、この期間に要項を繰り返し検討して改訂を重ね、マスクや消毒液といった必需品の調達を進めることができました。5月16日からの開館後は、要項に沿って感染予防の対策をとりながら、作品を展示して伝えるという美術館の原則的な活動を継続することができています。

今回の対策を講ずる過程で感じたのは、平時からの安全対策が感染症に対しても基本となり、有効であることでした。すなわち、日頃からの来館者の安全確保を意識した行動や、館内の清潔を維持することとそのための資材の備蓄などです。今回の感染症による災禍はまだ収束していませんが、この経験を有意なものとして蓄積し、安全で安心して芸術に触れることのできる環境の向上につなげたいと思います。

（学芸員 三谷 渉）



玄関自動扉から受付カウンターへ至るまでのスペース（風除室）に、感染症対策へのご協力をお願いを掲出し、消毒マットを設置しました。



受付カウンター脇に、消毒用エタノールを置き、ビニールシートで飛沫感染を防止する幕を作りました。職員はマスクと手袋を着用して対応します。

田辺市立美術館の休館について

来年、2021（令和3）年に、田辺市立美術館は開館から25周年を迎えます。これまで原則5年に一度、節目となる周年の前年に約半年間の休館期間をいただいて、施設の良好な状態の維持や改善のための工事を行ってきましたが、今年も同じように、来年の記念の年をより良い環境でスタートするための準備を行う計画です。

今回の工事の主になるのは、展示室1・2の照明設備の改修です。これまで展示ケースの中以外の壁面にあたる照明は、場所によって蛍光灯であったり、白熱灯であったりの制約があり、照度や角度の細かい調整も難しいものでした。これをすべての壁面についてほぼ同じ条件で照明の調整ができるようにして、LED照明器具を備えます。展示室3・4・5については5年前に同様の

改修を行っていますので、今回の工事によって、すべての展示室の壁面で照明効果の水準が上がります。来年4月からの展覧会にご期待いただければと思います。

この他にも経年の劣化が現れてきていた、防火・防犯扉の修繕を行って、人と作品の安全面についても抜かりなく対処する予定です。目に見える所も、そうでない所も、美術館のスタッフ全員が常日頃から点検と改良の計画を検討して、施設の保守と向上に努めています。

長期間の休館でご不便をおかけいたしますが、どうかご理解をいただいて、再開後の美術館にまたお越しいただけますよう、お願いいたします。

（学芸員 三谷 渉）

ORANGE Vol.33 付録 文人箋ミニ

ORANGE Vol.27の付録でご好評をいただいた「文人箋ミニ」の第二弾です。今回の文人箋には、前回ご紹介した近世の文人画家たちの精神を受け継いだ近代の画家、日高昌克と渡瀬凌雲の作品からそれぞれ2点を使用しています。

点線に沿って切り離してお使いください。ちょっとした贈り物に添えたり、書類を送る時のメモにしたり、様々なシーンでお使いいただけるのではないかと考えています。

作品紹介

日高昌克の《峻峰秋霽図》については、今号の表紙「作品紹介」をご参照ください。《白菜》は後年に度々描いた着彩の静物画の1つです。

渡瀬凌雲の《仙境熊野》は那智の滝と熊野灘の風景を中心に蓬莱仙境のイメージを描いた作品、《清秋風味》は秋の味覚数種類を描き中国文人の詩を画賛として加えた作品です。